



Red Hat Ansible Automation Platform 2.5

リリースノート

新機能、機能拡張、バグ修正の情報

Red Hat Ansible Automation Platform 2.5 リリースノート

新機能、機能拡張、バグ修正の情報

法律上の通知

Copyright © 2024 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

Red Hat Ansible Automation Platform のリリースノートでは、一般公開バージョンのすべての新機能と機能拡張、主な技術上の変更点、以前のバージョンからの主な修正、および既知のバグをまとめています。

目次

RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)	3
第1章 RED HAT ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM の概要	4
1.1. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM に含まれるもの	4
1.2. RED HAT ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM のライフサイクル	4
第2章 新機能および機能拡張	5
2.1. インストールの変更	5
2.2. デプロイメントトポロジー	5
2.3. 統合 UI	6
2.4. EVENT-DRIVEN ANSIBLE の機能 (自動化決定)	7
2.5. EVENT-DRIVEN ANSIBLE 2.5 と AUTOMATION CONTROLLER 2.4	7
2.6. RED HAT ANSIBLE LIGHTSPEED のオンプレミスデプロイメント	8
2.7. ANSIBLE PLUG-INS FOR RED HAT DEVELOPER HUB	8
2.8. ANSIBLE 開発ツール	8
2.9. RED HAT ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM SERVICE ON AWS	9
2.10. 機能拡張	9
第3章 非推奨の機能	11
3.1. 非推奨の API エンドポイント	12
第4章 削除された機能	15
第5章 変更された機能	17
第6章 既知の問題	18
6.1. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM	18
6.2. EVENT-DRIVEN ANSIBLE	18
6.3. ANSIBLE PLUG-INS FOR RED HAT DEVELOPER HUB	18
第7章 修正された問題	19
7.1. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM	19
7.2. AUTOMATION HUB	20
7.3. EVENT-DRIVEN ANSIBLE	20
7.4. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM OPERATOR	21
第8章 ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM ドキュメント	22
第9章 パッチリリース	25
9.1. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM パッチリリース 2024 年 12 月 3 日	25
9.2. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM パッチリリース 2024 年 11 月 18 日	28
9.3. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM パッチリリース 2024 年 10 月 28 日	29
9.4. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM パッチリリース 2024 年 10 月 14 日	31
9.5. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM パッチリリース 2024 年 10 月 7 日	32

RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)

このドキュメントの改善に関するご意見がある場合や、エラーを発見した場合は、<https://access.redhat.com> から Technical Support チームに連絡してください。

第1章 RED HAT ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM の概要

Red Hat Ansible Automation Platform は、エンタープライズアプリケーションのインフラストラクチャーライフサイクルを管理する自動化ワークロードの開発および操作を単純化します。Ansible Automation Platform は、運用、ネットワーク、セキュリティー、開発など、さまざまな IT ドメインだけでなく、多様なハイブリッド環境全体にも対応して機能します。採用、使用、理解が簡単な Ansible Automation Platform は、自動化におけるどの過程においても、企業全体の自動化を迅速に実装するために必要なツールを提供します。

1.1. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM に含まれるもの

Ansible Automation Platform	Automation Controller	Automation Hub	Event-Driven Ansible Controller	Insights for Ansible Automation Platform	プラットフォームゲートウェイ (統合 UI)
2.5	4.6.0	<ul style="list-style-type: none"> 4.10.0 ホスト型サービス 	1.1.0	ホスト型サービス	1.1

1.2. RED HAT ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM のライフサイクル

Red Hat が提供するメンテナンスのレベルは、Ansible Automation Platform リリースごとに異なります。詳細は、[Red Hat Ansible Automation Platform のライフサイクル](#) を参照してください。

第2章 新機能および機能拡張

2.1. インストールの変更

Ansible Automation Platform 2.5 以降では、3つの異なるオンプレミスデプロイメントモデルが完全にテストされます。既存のRPMベースのインストーラーとOperatorに加えて、コンテナインストーラーのサポートが追加されます。

コンテナファーストモデルへの移行に伴い、RPMベースのインストーラーは、今後のリリースで削除される予定です。Ansible Automation Platform 2.5のリリースとともに、非推奨の警告が発行されています。RPMインストーラーは、削除されるまでAnsible Automation Platform 2.5で引き続きサポートされます。一方で、今後は投資の重点が、RHELデプロイメントのコンテナベースのインストールとOpenShiftデプロイメントのOperatorベースのインストールに置かれます。現時点では、コンテナ化されたAnsible Automation Platform 2.4(テクノロジープレビュー)からコンテナ化されたAnsible Automation Platform 2.5へのアップグレードはサポートされていません。

2.2. デプロイメントトポロジー

Red Hatは、事前設定済みのデプロイメントオプションをお客様に提供するために、定義済みのトポロジーセットを使用してAnsible Automation Platform 2.5をテストしています。Ansible Automation Platformをさまざまなインフラストラクチャトポロジーやさまざまな環境設定にインストールすることは可能ですが、Red Hatが確実にサポートするのは、次の表に示すトポロジーです。

Ansible Automation Platform 2.5 GA リリース時点では、一部のトポロジーだけが完全にテストされています。Red Hatは、新しいトポロジーを定期的に追加し、完全にテストするデプロイメントオプションの範囲を徐々に拡大する予定です。新しいトポロジーをロールアウトする際に、そのトポロジーをリリースノートに記載します。

次の表に、Ansible Automation Platform 2.5でテスト済みのトポロジーを示します。

方式	インフラストラクチャー	説明	テスト済みのトポロジー
RPM	仮想マシン/ベアメタル	RPMインストーラーは、RPMを使用してホストマシンにプラットフォームをインストールすることにより、Red Hat Enterprise LinuxにAnsible Automation Platformをデプロイします。お客様は製品とインフラストラクチャーのライフサイクルを管理します。	<ul style="list-style-type: none"> ● RPM エンタープライズトポロジー ● RPM 混合エンタープライズトポロジー

方式	インフラストラクチャー	説明	テスト済みのトポロジー
コンテナ	仮想マシン/ベアメタル	コンテナインストーラーは、ホストマシン上のコンテナ内でプラットフォームを実行する Podman を使用して、Red Hat Enterprise Linux に Ansible Automation Platform をデプロイします。お客様は製品とインフラストラクチャーのライフサイクルを管理します。	<ul style="list-style-type: none"> ● コンテナエンタープライズトポロジー ● コンテナグローバルトポロジー
Operator	Red Hat OpenShift	Operator は、Red Hat OpenShift Operator を使用して、Red Hat OpenShift 内に Ansible Automation Platform をデプロイします。お客様は製品とインフラストラクチャーのライフサイクルを管理します。	<ul style="list-style-type: none"> ● エンタープライズ Operator トポロジー ● Operator グlobal トポロジー

詳細は、[テスト済みのデプロイメントモデル](#) を参照してください。

2.3. 統合 UI

2.5 より前のバージョンでは、Ansible Automation Platform は、Automation Controller、Automation Hub、Event-Driven Ansible Controller という 3 つの主要なサービスに分かれていました。各サービスに、スタンドアロンのユーザーインターフェイス、個別のデプロイメント設定、個別の認証スキーマが組み込まれていました。

Ansible Automation Platform 2.5 では、Ansible Automation Platform の認証と認可を処理するサービスとして、プラットフォームゲートウェイが提供されます。プラットフォームゲートウェイにより、Ansible Automation Platform を構成するすべてのサービスが 1 つの UI に統合されます。この統合 UI は、Ansible Automation Platform への一元的な入り口であり、1 つの場所からすべての Ansible Automation Platform サービスに認証してアクセスするためのプラットフォームユーザーインターフェイスとして機能します。

2.3.1. 用語の変更

統合 UI では、基盤となる各サービスが提供する機能的利点が強調されています。新しい UI 用語と従来の名称との対応関係を以下に示します。

- **自動化実行** は、Automation Controller サービスの機能を提供します。
- **自動化決定** は、Event-Driven Ansible サービスの機能を提供します。
- **自動化コンテンツ** は、Automation Hub サービスの機能を提供します。

2.4. EVENT-DRIVEN ANSIBLE の機能 (自動化決定)

Ansible Automation Platform 2.5 では、Event-Driven Ansible の機能が次の機能によって強化されました。

- 新しい Ansible Automation Platform UI を通じて、エンタープライズシングルサインオンとロールベースのアクセス制御を利用できます。これにより、次のように認証の一本化とすべての機能コンポーネントへのアクセスが可能になります。
 - 自動化実行 (Automation Controller)
 - 自動化決定 (Event-Driven Ansible)
 - 自動化コンテンツ (Automation Hub)
 - Automation Analytics
 - アクセス管理
 - Red Hat Ansible Lightspeed
- 簡易イベントルーティング機能により、イベントストリームが導入されます。イベントストリームは、ソースをルールブックに接続する簡単な方法です。この新しい機能を使用すると、1つのエンドポイントを作成してイベントソースからアラートを受信し、複数のルールブックでイベントを使用できます。これにより、ルールブックアクティベーションの設定が簡素化され、メンテナンスの必要性が減り、外部トラフィックに対して追加のポートを開く必要がなくなるため、リスクが軽減されます。
- Ansible Automation Platform 2.5 の Event-Driven Ansible では、水平スケーラビリティがサポートされるようになり、Event-Driven Ansible Controller の高可用性デプロイメントが可能になりました。これらの機能により、複数の Event-Driven Ansible ノードをインストールできるため、可用性の高いデプロイメントを作成できます。
- プラットフォーム全体での新しい Red Hat Ansible Automation Platform 認証情報タイプへの移行に伴い、ルールブックアクティベーションを有効にして Automation Controller でジョブを呼び出すための従来のコントローラートークンが置き換えられます。
- Event-Driven Ansible に、ルールブックアクティベーションに追加できる認証情報を管理する機能が追加されました。この認証情報は、ルールブックでイベントソースを認証するために使用できます。さらに、ルールブックアクティベーションに vault 認証情報をアタッチして、vault 変数をルールブックで使用できるようになりました。暗号化された認証情報と vault 変数により、企業は自社の環境内で Event-Driven Ansible をセキュアに使用できるようになります。
- `ansible.eda` コレクションに新しいモジュールが追加され、ユーザーが Ansible Playbook を使用して Event-Driven Ansible Controller の設定を自動化できるようになりました。

2.5. EVENT-DRIVEN ANSIBLE 2.5 と AUTOMATION CONTROLLER 2.4

Ansible Automation Platform 2.5 から新しくインストールしたバージョンの Event-Driven Ansible を、既存のバージョンの Automation Controller とともに使用できます。次のバージョンを使用したハイブリッド構成がサポートされています。

- Ansible Automation Platform 2.4 バージョンの Automation Controller (4.4 または 4.5)
- Ansible Automation Platform 2.5 バージョンの Event-Driven Ansible (1.1)

この構成では、Event-Driven Ansible の新規インストールのみを使用できます。RPM ベースのハイブリッドデプロイメントは、Red Hat によるフルサポートの対象です。この構成をセットアップする方法の詳細は、[Ansible Automation Platform 2.4 での Event-Driven Ansible 2.5 の使用](#) ガイドの **Event-Driven Ansible Controller 1.1** のインストールと **Automation Controller 4.4** または **4.5** の設定 の章を参照してください。

ハイブリッド構成を使用すると、新しい Event-Driven Ansible サービスをインストールし、ルールブックアクティベーションを設定して、バージョン 2.4 の Automation Controller でジョブテンプレートを実行できます。

2.6. RED HAT ANSIBLE LIGHTSPEED のオンプレミスデプロイメント

Red Hat Ansible Lightspeed with IBM watsonx Code Assistant は、自動化チームが Ansible コンテンツをより効率的に作成、導入、保守できるようにする生成 AI サービスです。現在、Ansible Automation Platform 2.5 のオンプレミスデプロイメントとして利用できます。

Ansible Automation Platform のお客様は、オンプレミスデプロイメントにより、データをより細かく制御し、企業のセキュリティポリシーへの準拠に対応できるようになります。たとえば、データプライバシー要件やエアギャップ要件により高い機密性が求められる業界の組織は、Red Hat Ansible Lightspeed と、IBM watsonx Code Assistant for Red Hat Ansible Lightspeed on Cloud Pak for Data の両方のオンプレミスデプロイメントを使用できます。Red Hat Ansible Lightspeed のオンプレミスデプロイメントは、Ansible Automation Platform 2.5 でサポートされています。詳細は、[Red Hat Ansible Lightspeed with IBM watsonx Code Assistant ユーザーガイド](#) の [Red Hat Ansible Lightspeed オンプレミスデプロイメントのセットアップ](#) の章を参照してください。

2.7. ANSIBLE PLUG-INS FOR RED HAT DEVELOPER HUB

Ansible plug-ins for Red Hat Developer Hub は、Ansible ファーストの Red Hat Developer Hub ユーザーエクスペリエンスを提供し、あらゆるスキルレベルの Ansible ユーザーの Ansible コンテンツ (Playbook やコレクションなど) 作成を簡素化します。Ansible プラグインは、Ansible 学習者のオンボーディングを加速し、組織全体で Ansible ユースケースの導入を効率化するためのキュレートされたコンテンツと機能を提供します。

Ansible プラグインは次の機能を提供します。

- Ansible ユーザー向けにカスタマイズされたホームページとナビゲーション
- Ansible を初めて使用するユーザーを支援するためにキュレートされた Ansible ラーニングパス
- ベストプラクティスに沿った Ansible Playbook とコレクションプロジェクトを作成するためのソフトウェアテンプレート
- サポートされている事前設定済みの開発環境とツールへのリンク

詳細は、[Ansible plug-ins for Red Hat Developer Hub](#) のドキュメントを参照してください。

2.8. ANSIBLE 開発ツール

Ansible 開発ツールは、Ansible Automation Platform に付属するツール群です。自動化の作成者が、Linux、MacOS、Windows プラットフォーム上で Playbook プロジェクト、実行環境、コレクションを作成、テスト、デプロイするのに役立ちます。Ansible の中核ツールを1つのパッケージに統合することで、ツール管理が簡素化され、自動化コンテンツ作成エクスペリエンスの推奨プラクティスが促進されます。

Ansible 開発ツールは、RHEL システム用の RPM パッケージと、Linux、Mac、Windows OS で使用できるサポートされているコンテナディストリビューションで配布されています。

Ansible 開発ツールは次のツールで構成されています。

- ansible-builder
- ansible-core
- ansible-lint
- ansible-navigator
- ansible-sign
- Molecule
- ansible-creator
- ansible-dev-environment
- pytest-ansible
- tox-ansible

詳細は、[Ansible Automation コンテンツの開発](#) を参照してください。

2.9. RED HAT ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM SERVICE ON AWS

Red Hat Ansible Automation Platform Service on AWS は、AWS Marketplace で購入した Ansible Automation Platform コントロールプレーンのデプロイメントです。Red Hat がサービスを管理するため、お客様のチームが自動化に集中できるようにします。

詳細は、[Red Hat Ansible Automation Platform Service on AWS](#) を参照してください。

2.10. 機能拡張

- Podman のインストール時に **mounts.conf** を提供する機能やローカルまたはリモートソースからコピーする機能が追加されました。(AAP-16214)
- 指定された SSL Web 証明書の SSL 鍵と証明書パラメーターを含むようにインベントリーファイルを更新しました。(AAP-13728)
- Operator によって作成された Kubernetes リソースに Ansible Automation Platform Operator のバージョンラベルを追加しました。(AAP-31058)
- ユーザー提供のデータベースに対する PostgreSQL 証明書認証をサポートするためのインストール変数を追加しました。(AAP-1095)
- NGINX をバージョン 1.22 に更新しました。(AAP-15128)
- REST API の新しい設定エンドポイントを追加しました。(AAP-13639)
- インストール時に Podman 環境の **RuntimeDirectorySize** を調整できるようになりました。(AAP-11597)

- インストールプログラムに **eda-server** の **SAFE_PLUGINS_FOR_PORT_FORWARD** 設定のサポートが追加されました。(AAP-21503)
- インベントリーコンテンツをテスト済みのトポロジーに合わせて調整し、カスタム設定が必要な場合にグループや変数に簡単にアクセスできるようにコメントを追加しました。(AAP-30242)
- 変数 **automatededacontroller_allowed_hostnames** が不要になり、Event-Driven Ansible インストールでサポートされなくなりました。(AAP-24421)
- **eda-server** が、設定でプラグインが許可されている場合にのみ、着信接続を必要とするソースプラグインを持つルールブックのポートを開くようになりました。(AAP-17416)
- Event-Driven Ansible の設定が専用の YAML ファイルに移動しました。(AAP-13276)
- Ansible Automation Platform 2.5 以降、コントローラーコレクション (**ansible.controller**) を使用するお客様は、プラットフォームコレクション (**ansible.platform**) を単一のエントリーポイントとして使用します。また、プラットフォームコレクションを使用して組織、ユーザー、およびチームをシードする必要があります。(AAP-31517)
- ユーザーが初めてログインして Automation Controller のライセンス認証を行うと、デフォルトで Automation Analytics をオプトインしたことになります。(ANSTRAT-875)

第3章 非推奨の機能

非推奨の機能は、Ansible Automation Platform にまだ含まれており、このバージョンのサポートサイクル中は引き続きサポートされます。ただし、非推奨の機能は、Ansible Automation Platform の今後のリリースで削除される予定です。新しいデプロイメントには推奨されません。

次の表に、Ansible Automation Platform 2.5 で非推奨になった機能に関する情報を示します。

コンポーネント	機能
Automation Controller、Automation Hub、および Event-Driven Ansible Controller	Automation Controller と Automation Hub のトークンは非推奨です。トークンを生成する場合は、プラットフォームゲートウェイを使用して作成してください。 プラットフォームゲートウェイは、Ansible Automation Platform の認証と認可を処理するサービスです。これは Ansible Automation Platform への一元的な入り口であり、プラットフォームのユーザーインターフェイスを提供するため、ユーザーは1つの場所からすべての Ansible Automation Platform サービスに認証してアクセスできます。
Automation Controller と Automation Hub	Automation Controller および Automation Hub への非ローカル認証は、すべて非推奨です。プラットフォームゲートウェイを使用して、SAML、LDAP、RADIUS などの外部認証を設定してください。
Ansible-core	COLLECTIONS_PATHS の INI 設定オプションは非推奨です。代わりに単数形の COLLECTIONS_PATH を使用してください。
Ansible-core	環境変数 ANSIBLE_COLLECTIONS_PATHS は非推奨です。代わりに単数形の ANSIBLE_COLLECTIONS_PATH を使用してください。
Ansible-core	エントリーポイント get_host_vars または get_group_vars を使用する古いスタイルの Ansible vars プラグインは、ansible-core 2.16 で非推奨になりました。ansible-core 2.18 で削除される予定です。Ansible プラグインを更新して BaseVarsPlugin から継承し、エントリーポイントとして get_vars メソッドを定義してください。
Ansible-core	STRING_CONVERSION_ACTION 設定オプションは、ansible-core コードベースでは使用されなくなったため、非推奨になりました。
Ansible-core	接続プラグインを設定するための smart オプションは削除されます。SSH プロトコルと Paramiko プロトコルを選択するという主な目的が不要になったためです。代わりに明示的な接続プラグインを選択してください。
Ansible-core	vault および unvault フィルター内の vaultid パラメーター (ドキュメントに未記載) は非推奨であり、ansible-core バージョン 2.20 で削除される予定です。代わりに vault_id を使用してください。
Ansible-core	yum_repository の文字列パラメーター keepcache は非推奨です。
Ansible-core	API ansible.module_utils.common.process.get_bin_path の required パラメーターは非推奨です。

コンポーネント	機能
Ansible-core	module_utils - ansible.module_utils.basic から次のコンビニエンスヘルパーをインポートすることが非推奨になりました。 get_exception 、 literal_eval 、 _literal_eval 、 datetime 、 signal 、 types 、 chain 、 repeat 、 PY2 、 PY3 、 b 、 binary_type 、 integer_types 、 iteritems 、 string_types 、 test_type 、 map 、 shlex_quote 。 ソース定義からヘルパーをインポートしてください。
Ansible-core	ansible-doc - ロール entrypoint の属性は非推奨です。最終的に ansible-core の ansible-doc に表示されなくなる予定です。
自動化実行環境	実行環境 29 は、Ansible Automation Platform 2.5 以降の次のメジャーリリースで非推奨になります。
インストーラー	Ansible チームは、Red Hat Enterprise Linux 上の Ansible Automation Platform のインストーラーを改善する方法を検討しています。これに伴い、ホスト OS 上で直接 RPM を使用してコンポーネントをデプロイする方法が変更される可能性があります。RPM は、Podman を介して実行されるコンテナにデプロイされるパッケージに置き換えられる予定です。これは、ホスト OS 上のコンテナ (実行環境) 内の Podman で自動化が実行される現在の方法に似ています。変更はリリースノートを通じて通知されますが、削除は Ansible Automation Platform のメジャーリリースバージョンで行われます。
自動化メッシュ	Work Python オプションが非推奨となり、今後のリリースで自動化メッシュから削除される予定です。

3.1. 非推奨の API エンドポイント

機能が削除されるか、他の機能に置き換えられるため、今後のリリースで削除される API エンドポイントです。たとえば、プラットフォームゲートウェイの一元的な認証システムへの移行に伴い、すべての認証操作がプラットフォームゲートウェイで実行されるようになるため、Automation Controller と Automation Hub の既存の認可 API が、今後のリリースで非推奨になります。

コンポーネント	エンドポイント	機能
Automation Controller	/api/o	トークン認証はプラットフォームゲートウェイに移行します。
Automation Hub	/api/login/keycloak	プラットフォームゲートウェイに移行します。
Automation Hub	/api/v3/auth/token	コレクションのプルに使用されるトークン認証は、プラットフォームゲートウェイトークンに移行します。

コンポーネント	エンドポイント	機能
Automation Controller	/api/v2/organizations	プラットフォームゲートウェイに移行します。
Automation Controller	/api/v2/teams	プラットフォームゲートウェイに移行します。
Automation Controller	/api/v2/users	プラットフォームゲートウェイに移行します。
Automation Controller	/api/v2/roles	コントローラー固有のロール定義は、 /api/controller/v2/role_definitions に移行します。
Automation Controller	次のロールリスト: <ul style="list-style-type: none"> ● /api/v2/teams/{id}/roles/ ● /api/v2/users/{id}/roles/ 	コントローラー固有のリソース権限は、 /api/controller/v2/role_user_assignments および /api/controller/v2/role_team_assignments に移行します。
Automation Controller	次のオブジェクトロールリスト: <ul style="list-style-type: none"> ● /api/v2/credentials/{id}/object_roles/ ● /api/v2/instance_groups/{id}/object_roles/ ● /api/v2/inventories/{id}/object_roles/ ● /api/v2/job_templates/{id}/object_roles/ ● /api/v2/organizations/{id}/object_roles/ ● /api/v2/projects/{id}/object_roles/ ● /api/v2/teams/{id}/object_roles/ ● /api/v2/workflow_job_templates/{id}/object_roles/ 	コントローラー固有のリソース権限は、 /api/controller/v2/role_user_assignments および /api/controller/v2/role_team_assignments に移行します。

コンポーネント	エンドポイント	機能
Automation Controller	<p>次のリソースアクセスリスト:</p> <ul style="list-style-type: none">● <code>/api/v2/credentials/{id}/access_list/</code>● <code>/api/v2/instance_groups/{id}/access_list/</code>● <code>/api/v2/inventories/{id}/access_list/</code>● <code>/api/v2/job_templates/{id}/access_list/</code>● <code>/api/v2/organizations/{id}/access_list/</code>● <code>/api/v2/projects/{id}/access_list/</code>● <code>/api/v2/teams/{id}/access_list/</code>● <code>/api/v2/users/{id}/access_list/</code>● <code>/api/v2/workflow_job_templates/{id}/access_list/</code>	代替機能はまだありません。

第4章 削除された機能

削除された機能は、以前のリリースで非推奨になった機能です。これらは Ansible Automation Platform から削除されており、今後はサポートされなくなります。

次の表に、Ansible Automation Platform 2.5 で削除された機能に関する情報を示します。

コンポーネント	機能
Automation Controller	Automation Controller のプロキシサポートが削除されました。ロードバランサーは、コントローラーではなくプラットフォームゲートウェイを参照する必要があります。
ansible-lint	Ansible の古い include タスク構文のサポートが、バージョン 2.16 で削除され、 include_tasks または import_tasks に移行しました。 include_tasks や import_tasks など、現在サポートされている Ansible 構文を使用するようにコンテンツを更新してください。
Event-Driven Ansible Controller	Event-Driven Ansible Controller のトークンが非推奨になりました。該当する設定がルールブックアクティベーションから削除され、Ansible Automation Platform の認証情報タイプに置き換えられました。
Ansible-core	Windows Server バージョン 2012 および 2012 R2 のサポートが削除されました。Microsoft のサポート終了日が 2023 年 10 月 10 日であるためです。これらのバージョンの Windows Server は、Ansible Automation Platform 2.5 リリースではテストされていません。Red Hat は、これらの機能が今回のリリースおよび今後のリリースでも期待どおりに動作することを保証しません。
Ansible-core	ActionBase クラスを持つ Action プラグインで、非推奨の _remote_checksum メソッドが削除されました。代わりに _execute_remote_stat を使用してください。
Ansible-core	非推奨の FileLock クラスが削除されました。独自の実装を追加するか、サードパーティーのサポートをご利用ください。
Ansible-core	Automation Controller でサポートされるバージョンから Python 3.9 が削除されました。Python 3.10 以降を使用してください。
Ansible-core	ansible-core 2.12 で非推奨になった include モジュールが削除されました。代わりに include_tasks または import_tasks を使用してください。
Ansible-core	Templar - init の非推奨の shared_loader_obj パラメーターが削除されました。
Ansible-core	fetch_url - gzip が利用できない場合の decompress の自動無効化が削除されました。
Ansible-core	inventory_cache - 非推奨の default.fact_caching_prefix ini 設定オプションが削除されました。代わりに defaults.fact_caching_prefix を使用してください。

コンポーネント	機能
Ansible-core	<p>module_utils/basic.py - サポートされるリモートバージョンから Python 3.5 が削除されました。Python バージョン 2.7 または Python バージョン 3.6 以降が必要になりました。</p> <p>サポートされるリモートバージョンから Python バージョン 2.7 および 3.6 が削除されました。ターゲットの実行には Python 3.7 以降を使用してください。</p> <p>注記: これは Ansible バージョン 2.17 にのみ適用されます。</p> <p>Python 2 のサポートの削除に伴い、yum モジュールと yum action プラグインが削除され、dnf にリダイレクトされるようになりました。</p>
Ansible-core	stat - 未使用の get_md5 パラメーターが削除されました。
Ansible-core	非推奨の JINJA2_NATIVE_WARNING 環境変数が削除されました。
Ansible-core	ssh 接続プラグインから非推奨の scp_if_ssh が削除されました。
Ansible-core	ansible.utils.encrypt から非推奨の crypt サポートが削除されました。
実行環境	Python リンクが ubi9 ベースの実行環境で使用できなくなりました。使用できるのは python3 だけです。 python または /bin/python を使用するスクリプトを python3 または /bin/python3 に置き換えてください。

第5章 変更された機能

変更された機能は、非推奨ではなく、追って通知があるまで引き続きサポートされます。

次の表に、Ansible Automation Platform 2.5 で変更された機能に関する情報を示します。

コンポーネント	機能
Automation Hub	エラーコードが 403 から 401 に変更されました。ステータスコード 401 ではなく 403 に依存する API クライアントを使用している場合は、ロジックを更新する必要があります。標準 UI の使用は期待どおりに機能します。
Event-Driven Ansible	エンドポイント <code>/extra_vars</code> が <code>/activations</code> 内のプロパティに移動しました。
Event-Driven Ansible	エンドポイント <code>/credentials</code> が <code>/eda-credentials</code> に置き換えられました。これは、Event-Driven Ansible の拡張認証情報機能の一部です。詳細は、 Event-Driven Ansible Controller ユーザーガイド の Event-Driven Ansible Controller の認証情報のセットアップ の章を参照してください。
Event-Driven Ansible	プラットフォームゲートウェイで管理されるリソースを、Event-Driven Ansible で追加、編集、または削除できなくなりました。組織、チーム、またはユーザーの作成、編集、または削除は、プラットフォームゲートウェイエンドポイントを通じてのみ可能です。プラットフォームゲートウェイエンドポイントを使用すると、組織またはチームのメンバーシップを編集したり、外部認証を設定したりすることもできます。
API	ユーザーの監査が変更されました。コントローラー API ではなく、プラットフォーム API を通じてユーザーが監査されるようになりました。この変更は、クラウドサービスとオンプレミスの両方のデプロイメントにおける Ansible Automation Platform に適用されます。
Automation Controller、Automation Hub、プラットフォームゲートウェイ、および Event-Driven Ansible	ユーザー権限は、プラットフォームゲートウェイの信頼できる情報源を監査します。IdP (SSO) を使用する場合、IdP が、ユーザー権限監査の信頼できる情報源である必要があります。Ansible Automation Platform プラットフォームゲートウェイを SSO なしで使用する場合、アプリケーション固有の UI や API ではなく、プラットフォームゲートウェイが、ユーザー権限の信頼できる情報源である必要があります。

第6章 既知の問題

このセクションでは、Ansible Automation Platform 2.5 の既知の問題に関する情報を提供します。

6.1. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM

- Podman インストールの最大ログサイズを制御するために、`containers.conf` に `podman_containers_conf_logs_max_size` 変数を追加しました。デフォルト値は 10 MiB です。(AAP-12295)
- 他のコンテキストなしで `pg_host=` 値を設定しても、Automation Controller の `settings.py` の `HOST` セクションが空にならなくなりました。回避策として、`pg_host=` 値を削除するか、`pg_host=""` に設定してください。(AAP-31915)
- ジョブテンプレート、ワークフロージョブテンプレート、ワークフロービジュアライザーノード、およびスケジュールの変数に **Prompt on launch** を使用すると、ジョブの起動時やワークフローおよびスケジュールの設定時にデフォルトの変数が表示されません。(AAP-30585)
- 使用されない `ANSIBLE_BASE_` 設定が、ジョブ実行の環境変数として含まれていません。`SECRET` という接尾辞で終わるこれらの変数は、Ansible Automation Platform で使用されず、将来のパッチで削除されるまで無視することができます。(AAP-32208)

6.2. EVENT-DRIVEN ANSIBLE

- mTLS イベントストリームの作成は、すべてのインストール方法でデフォルトで禁止される必要があります。現在、OpenShift Container Platform インストールでは禁止されていますが、コンテナインストールや RPM インストールでは禁止されていません。(AAP-31337)
- Redis のプライマリーノードが **failed** 状態になり、新しいプライマリーノードが昇格すると、Event-Driven Ansible のワーカーとスケジューラーがクラスターに再接続できなくなります。これにより、コンテナまたは Pod がリサイクルされるまでアクティベーションが失敗します。(AAP-30722)
詳細は、KCS の記事 [Redis failover causes Event-Driven Ansible activation failures](#) を参照してください。

6.3. ANSIBLE PLUG-INS FOR RED HAT DEVELOPER HUB

- Python VS Code 拡張機能 v2024.14.1 が OpenShift Dev Spaces バージョン 1.9.3 で動作しないため、Ansible VS Code 拡張機能のロードが妨げられます。回避策として、Python VS Code 拡張機能のバージョンを 2024.12.3 にダウングレードしてください。
- Ansible Content Creator の **Get Started** ページリンクが、OpenShift Dev Spaces バージョン 1.9.3 で機能しません。回避策として、[Ansible VS Code Command Palette](#) を使用して機能にアクセスしてください。

第7章 修正された問題

このセクションでは、Ansible Automation Platform 2.5 で修正された問題に関する情報を提供します。

7.1. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM

- SELinux が有効な場合に semanage コマンドが使用可能であることをインストーラーが確認するようになりました。(AAP-24396)
- インストーラーが、以前にインストールされた環境の nginx サービスの起動を試みずに、証明書を更新できるようになりました。(AAP-19948)
- 既存の Automation Controller がバージョン 4.4.0 より古い場合、Event-Driven Ansible のインストールが失敗するようになりました。(AAP-18572)
- コントローラーがインベントリにない場合に、コントローラーの URL を使用して Event-Driven Ansible を単独で正常にインストールできるようになりました。(AAP-16483)
- FIPS 環境でユーザーを作成する Postgres タスクで `scram-sha-256` が使用されるようになりました。(AAP-16456)
- インストーラーがコントローラーの新しい `SECRET_KEY` を正常に生成するようになりました。(AAP-15513)
- バックアップまたは復元を実行する前に、バックアップおよび復元のステージングファイルおよびディレクトリーをすべて確実にクリーンアップしてください。バックアップまたは復元後に、ファイルを削除対象としてマークする必要もあります。(AAP-14986)
- SSL モード `verify-full` の Postgres バージョンをチェックするときに、Postgres 証明書が一時的にコピーされるようになりました。(AAP-14732)
- セットアップスクリプトが、指定されたログパスに書き込み権限がない場合に警告を出し、デフォルトパスに書き込み権限がない場合に失敗するようになりました。(AAP-14135)
- Event-Driven Ansible ユーザーの root ユーザーによって、linger 設定が正しく設定されるようになりました。(AAP-13744)
- コンポーネントホストのサブジェクト代替名が、HTTPS が有効な場合にのみ、証明書への署名がチェックされるようになりました。(AAP-7737)
- 組織を作成および編集するための UI で、`Max hosts` 値が検証されるようになりました。この値は整数で、0 - 214748364 の範囲の値である必要があります。(AAP-23270)
- Automation Controller が含まれず、外部データベースが含まれるインストールで、不要な内部 Postgres サーバーがインストールされなくなりました。(AAP-29798)
- インストーラー内のすべての `pg_port` 変数にデフォルトのポート値が追加されました。(AAP-18484)
- Podman 用の Event-Driven Ansible の `linger` 設定を適用するときに、`XDG_RUNTIME_DIR` が定義されるようになりました。(AAP-18341)*
- RHEL 9 で復元プロセスが `pulpcore-worker` サービスを停止できない問題を修正しました。(AAP-12829)

- 外部の Postgres および内部管理の Postgres の 127.0.0.1 で署名された Postgres に影響を与える verify-full の Postgres `sslmode` を修正しました。(AAP-7107)
- Automation Hub コンテンツ署名のサポートを修正しました。(AAP-9739)
- ansible-core の問題 #82295 の変更に合わせて、条件付きコードステートメントを修正しました。(AAP-19053)
- データベースのインストールにカスタムポートを指定すると Postgres のインストールが壊れるという問題を解決しました。(AAP-30636)

7.2. AUTOMATION HUB

- Automation Hub が nginx のシステム暗号化ポリシーを使用するようになりました。(AAP-17775)

7.3. EVENT-DRIVEN ANSIBLE

- Swagger API ドキュメントの URL が末尾のスラッシュを含む 404 エラーを返すバグを修正しました。(AAP-27417)
- スタックトレースエラーがログに誤って含まれるバグを修正しました。(AAP-23605)
- 外部キー ID が存在しない場合に API がエラー 400 ではなくエラー 500 を返すバグを修正しました。(AAP-23105)
- プロジェクトの Git ハッシュが空になることがあるバグを修正しました。(AAP-21641)
- Podman の認証エラーにより起動時にアクティブ化が失敗することがあるバグを修正しました。(AAP-21067)
- 不正なルールブックが含まれている場合にプロジェクトをインポートできないバグを修正しました。(AAP-20868)
- `EDA_CSRF_TRUSTED_ORIGINS` が追加されました。これは、ユーザー入力によって設定することも、インストーラーによってデフォルトで指定または決定される許可されたホスト名に基づいて定義することもできます。(AAP-19319)
- リダイレクトを必要とする UI の変更に従って、すべての Event-Driven Ansible トラフィックが `/eda/` にリダイレクトされるようになりました。(AAP-18989)
- イベント駆動型自動化のバックアップからの復元に使用するターゲットデータベースを修正しました。(AAP-17918)
- コントローラーなしで Event-Driven Ansible をインストールする場合の Automation Controller URL チェックを修正しました。(AAP-17249)
- 以前に保存したイベントに適用される条件でメンバーシップ Operator が失敗した場合に発生するバグを修正しました。(AAP-16663)
- カスタム HTTPS ポートの Event-Driven Ansible nginx 設定を修正しました。(AAP-16000)
- インストールが完了すると、ターゲットサービスのみではなく、すべての Event-Driven Ansible サービスが有効になります。Event-Driven Ansible サービスは、セットアップ完了後に必ず起動します。(AAP-15889)

7.4. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM OPERATOR

- Django REST Framework (DRF) の参照可能なビューを修正しました。(AAP-25508)

第8章 ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM ドキュメント

Red Hat Ansible Automation Platform 2.5 のドキュメントは、重要な機能に関する更新情報とドキュメントの強化により、ユーザーエクスペリエンスが向上しています。

Ansible Automation Platform 2.5 のドキュメントの強化点は次のとおりです。

- 以前存在していた **Automation Controller トークンの設定** の章が廃止され、[Red Hat Ansible Automation Platform 認証情報の設定](#) というトピックに置き換えられました。Event-Driven Ansible Controller が一元的な認証およびプラットフォーム UI と統合されたため、今後はルールブックアクティベーションに必要な認証プロセスが簡素化されます。
- 2.5 のドキュメントの変更は、用語と製品の変更を反映したものです。さらに、コンテンツをまとめてドキュメントの数を減らしました。
次の表は、2.5 リリースのタイトルの変更をまとめたものです。

バージョン 2.4 のドキュメントタイトル	バージョン 2.5 のドキュメントタイトル
Red Hat Ansible Automation Platform のリリースノート	リリースノート
該当なし	新: Automation Analytics の使用
Red Hat Ansible Automation Platform 計画ガイド	インストール計画
コンテナ化された Ansible Automation Platform のインストールガイド (テクノロジープレビューリリース)	コンテナインストール (最初の一般提供リリース)
Ansible Automation Platform Operator の OpenShift Container Platform へのデプロイ	OpenShift Container Platform へのインストール
<ul style="list-style-type: none"> ● Automation Controller のスタートガイド ● Automation Hub のスタートガイド ● Event-Driven Ansible のスタートガイド 	新: Ansible Automation Platform のスタートガイド
Ansible Automation Platform の Central Authentication のインストールおよび設定	アクセス管理と認証
Ansible Playbook のスタートガイド	Ansible Playbook のスタートガイド
Ansible Automation Platform 操作ガイド	Ansible Automation Platform の運用
Operator ベースのインストール向け Ansible Automation Platform Automation Mesh	マネージドクラウドまたは Operator 環境向けの自動化メッシュ
仮想マシンベースのインストール向け Ansible Automation Platform Automation Mesh	仮想マシン環境向け自動化メッシュ

バージョン 2.4 のドキュメントタイトル	バージョン 2.5 のドキュメントタイトル
Operator ベースのインストールにおけるパフォーマンスの考慮事項	Operator 環境のパフォーマンスに関する考慮事項
Ansible Automation Platform Operator バックアップおよびリカバリーガイド	Operator 環境のバックアップとリカバリー
Ansible Automation Platform のトラブルシューティング	Ansible Automation Platform のトラブルシューティング
Ansible Automation Platform ハードニングガイド	2.5 リリースでは利用できません。後日公開されません。
Automation Controller ユーザーガイド	自動化実行の使用
Automation Controller 管理ガイド	自動化実行の設定
Automation Controller API の概要	自動化実行 API の概要
Automation Controller API リファレンス	自動化実行 API リファレンス
Automation Controller CLI リファレンス	自動化実行 CLI リファレンス
Event-Driven Ansible ユーザーガイド	自動化決定の使用
Automation Hub でのコンテンツの管理	- 自動化コンテンツの管理 - 自動化コンテンツ API リファレンス
Ansible セキュリティー自動化ガイド	Ansible セキュリティー自動化ガイド
<ul style="list-style-type: none"> ● Automation Calculator の使用 ● Ansible 自動化環境に関するレポートの表示 ● Job Explorer を使用した Automation Controller ジョブ実行の評価 ● Automation Saving Planner を使用して自動化ジョブの計画 	Automation Analytics の使用
Ansible Automation Platform のクリエイターガイド	自動化コンテンツの開発
Automation content navigator creator ガイド	コンテンツナビゲーターの使用
実行環境の作成および消費	実行環境の作成と使用

バージョン 2.4 のドキュメントタイトル	バージョン 2.5 のドキュメントタイトル
Ansible plug-ins for Red Hat Developer Hub のインストール	Ansible plug-ins for Red Hat Developer Hub のインストール
Ansible plug-ins for Red Hat Developer Hub の使用	Ansible plug-ins for Red Hat Developer Hub の使用

第9章 パッチリリース

Ansible Automation Platform 2.5 のセキュリティー、バグ修正、機能拡張は、非同期エラータとしてリリースされます。すべての Ansible Automation Platform エラータは、[Red Hat Ansible Automation Platform のダウンロード](#) ページから入手できます。

Red Hat カスタマーポータルユーザーは、Red Hat Subscription Management (RHSM) のアカウント設定で、エラータ通知を有効にできます。エラータ通知を有効にすると、登録されたシステムに関連するエラータが新たにリリースされるたびに、メールで通知が届きます。



注記

Ansible Automation Platform のエラータ通知メールを生成するには、Red Hat カスタマーポータルユーザーアカウントにシステムが登録されており、そのシステムが Ansible Automation Platform のエンタイトルメントを使用している必要があります。

リリースノートのパッチリリースセクションは、Ansible Automation Platform 2.5 のパッチリリースの機能拡張とバグ修正に関する情報を提供するために、随時更新されます。

関連情報

- Ansible Automation Platform での非同期エラータサポートの詳細は、[Red Hat Ansible Automation Platform のライフサイクル](#) を参照してください。
- Common Vulnerabilities and Exposures (CVE) の詳細は、[What is a CVE?](#) および [Red Hat CVE Database](#) を参照してください。

9.1. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM パッチリリース 2024 年 12 月 3 日

Ansible Automation Platform のこのリリースでは、次の機能拡張とバグ修正が実装されています。

9.1.1. 機能拡張

9.1.1.1. Ansible Automation Platform

- Red Hat Ansible Lightspeed が 2.5.241127 に更新されました。
- **redhat.insights** Ansible コレクションが 1.3.0 に更新されました。
- **ansible.eda** コレクションが実行環境および意思決定環境イメージで 2.2.0 に更新されました。

9.1.1.2. Ansible Automation Platform Operator

- 今回の更新により、PostgreSQL SSL/TLS モードを Automation Hub Operator で適切な **sslrootcert** 設定を使用して **verify-full** または **verify-ca** に設定できるようになりました。

9.1.1.3. コンテナベースの Ansible Automation Platform

- 今回の更新により、Digest および **Image Digest** の代わりに、コンテナイメージからの **ID** および **Image** フィールドが使用され、コンテナの更新がトリガーされるようになりました。

- 今回の更新により、Event-Driven Ansible クレデンシャルのレジストリー URL 値を更新できるようになりました。
- 今回の更新で、メモリー設定が大きいシステムでは、**kernel.keys.maxkeys** および **kernel.keys.maxbytes** 設定が増加しました。
- **ansible_connection=local** を **inventory-growth** ファイル に追加し、その使用方法を明確にしました。

9.1.1.4. ドキュメントの更新

- 今回の更新により、コンテナの増加トポロジーおよびコンテナエンタープライズトポロジーが更新され、s390x (IBM Z)アーキテクチャーテストサポートが含まれるようになりました。

9.1.1.5. RPM ベースの Ansible Automation Platform

- 今回の更新により、Event-Driven Ansible クレデンシャルのレジストリー URL 値を更新できるようになりました。

9.1.2. バグ修正

9.1.2.1. 全般

この更新により、次の CVE が解決されました。

- [CVE-2024-52304 Automation-controller](#): チャンクの拡張の誤った解析により、smuggling を要求すると[aiohttp](#) が脆弱です。

9.1.2.2. Ansible Automation Platform Operator

- 今回の更新により、不足している Ansible Automation Platform Operator カスタムリソース定義(CRD)が **aap-must-gather** コンテナイメージに追加されました。
- コントロールプレーンがダウンしたときに HTTP 502 エラーを防ぐために、プロキシ設定でのプラットフォームゲートウェイ認証が無効になりました。
- Red Hat の favicon が Automation Controller および Event-Driven Ansible API タブに正しく表示されるようになりました。
- 今回の更新により、Ansible Automation Platform 2.4 から 2.5 へのアップグレード中に、Automation Controller の管理者パスワードが再利用されるようになりました。
- **AnsibleAutomationPlatformRestore** を調整するときに未定義変数(**_controller_enabled**)を修正しました。データベースシークレットが誤って設定されていたため、復元時の Automation Hub Operator **pg_restore** エラーを修正しました。

9.1.2.3. Automation Controller

- 更新されたログ動詞を取得するために uWSGI のマイナーバージョンを更新。
- **rrule** の間隔が **HOURLY** または **MINUTELY** に設定されている場合の誤った時間にジョブの実行スケジュールを修正しました。
- 機密データがジョブ出力に表示される問題を修正しました。

- 関連のないジョブが他のジョブの依存関係としてマークされる問題を修正しました。
- ワークロードを最適に分散するために、デフォルトのコンテナグループ Pod 仕様に Pod の非アフィニティー設定が含まれています。

9.1.2.4. コンテナベースの Ansible Automation Platform

- 今回の更新により、マネージドデータベースノードの使用時に **postgresql_admin_username** 値を変更できなくなりました。
- PCP モニタリングロールの更新サポートを追加しました。
- コントロールプレーンがダウンしたときに HTTP 502 エラーを防ぐために、プロキシ設定でのプラットフォームゲートウェイ認証が無効になりました。
- 今回の更新により、Redis グループに専用ノードを使用できるようになりました。
- プラットフォームゲートウェイで TLS を無効にすると、インストールが失敗する問題を修正しました。
- プラットフォームゲートウェイプロキシで TLS を無効にすると、インストールが失敗する問題を修正しました。
- プラットフォームゲートウェイのアンインストールで、コンテナの systemd ユニットファイルがディスク上に残される問題を修正しました。
- **hub_collection_signing=false** だが **hub_container_signing=true** 時に Automation Hub コンテナ署名サービスの作成が失敗する問題を修正しました。
- コンテナ化された実行ノードで "Permission denied" エラーが発生するという receptor コンテナの **HOME** 環境変数の問題を修正しました。
- 多くのハブノードの設定時に GPG エージェントソケットを適切に設定しない問題を修正しました。これにより、**/var/tmp/pulp** に GPG ソケットファイルが作成されないという問題が修正されました。
- 今回の更新により、初回のデプロイメント後にプラットフォームゲートウェイポートの値を変更できるようになりました。

9.1.2.5. Receptor

- Receptor ランタイムパニックエラーの原因となっていた問題を修正しました。

9.1.2.6. RPM ベースの Ansible Automation Platform

- Automation Controller の更新後に **metrics-utility** コマンドを実行できない問題を修正しました。
- **/etc/tower/uwsgi.ini** ファイルに対する所有者とグループの権限を修正しました。
- インベントリーファイルに **eda_node_type** が定義されていない場合、バックアップが失敗する問題を修正しました。
- インベントリーファイルで **routable_hostname** が定義されていない場合、復元が失敗する問題を修正しました。

- 今回の更新により、**inventory-growth** ファイルが RPM インストーラーに含まれるようになりました。
- dispatcher サービスが **FATAL** ステータスになり、数分後にデータベース障害後に新しいジョブを処理できない問題を修正しました。
- コントロールプレーンがダウンした場合に UI にアクセスできるように、プロキシ設定でプラットフォームゲートウェイ認証が無効になっていました。
- 今回の更新により、receptor データディレクトリーが **receptor_datadir** 変数を使用して設定できるようになりました。

9.2. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM パッチリリース 2024 年 11 月 18 日

Ansible Automation Platform のこのリリースでは、次の機能拡張とバグ修正が実装されています。

9.2.1. 機能拡張

- このリリースでは、各コンポーネントのスタンドアロン URL のルート / に移動したときに表示されるリダイレクトページが実装されました。API エンドポイントは引き続き機能します。これは、Event-Driven Ansible、Automation Controller、Ansible Automation Platform Operator、および OpenShift Container Platform に影響します。

9.2.2. バグ修正

9.2.2.1. 全般

この更新により、次の CVE が解決されました。

[CVE-2024-9902](#) ansible-core: 許可されていないコンテンツを Ansible-core ユーザーが読み書きする可能性がある

[CVE-2024-8775](#) ansible-core: 不適切なロギングにより、Ansible vault ファイル内の機密情報が公開される

9.2.2.2. Ansible Automation Platform

- ユーザーがインベントリーグループのホストをフィルタリングできず、Ansible Automation Platform UI で **Failed to load** オプションが返される問題を修正しました。

9.2.2.3. 実行環境

- Python 3.11 の互換性を修正するために、**ee-minimal** および **ee-supported** コンテナイメージで **pywinrm** が 0.4.3 に更新されます。

9.2.2.4. Ansible Automation Platform Operator

- **bundle_cacert_secret** を定義するときにインデントが正しくないために発生する構文エラーを修正しました。
- Ansible Automation Platform のデフォルトの Operator カタログが、namespace スコープではなくクラスタースコープに揃えられていた問題を修正しました。

- Redis の **statefulset** およびゲートウェイデプロイメントの **tolerations** と **node_selector** を設定する機能が追加されました。
- Microsoft Azure on Cloud マネージドデプロイメントの問題を解決するために、**Ingress** を使用する場合には、必ずプラットフォーム URL ステータスを設定してください。この問題は、Azure Kubernetes Service で利用できない OpenShift Container Platform ルートを検索するため、Ansible Automation Platform Operator が完了に失敗することが原因です。
- Ansible Automation Platform Operator の説明でコードブロックが正しくレンダリングされない問題を修正しました。
- OIDC 認証リダイレクトフローを修正するには、ゲートウェイで **CONTROLLER_SSO_URL** および **AUTOMATION_HUB_SSO_URL** 設定を指定する必要があります。
- OIDC 認証リダイレクトフローを修正するには、**SERVICE_BACKED_SSO_AUTH_CODE_REDIRECT_URL** 設定を指定する必要があります。

9.2.2.5. コンテナベースの Ansible Automation Platform

- **gateway_main_url** 変数にポート値が定義されていない場合に、コンテナインストーラーが不正な実行環境イメージ参照エラーで失敗する問題を修正しました。
- コンテナインストーラーが、決定環境の **image_url** を指定するときにポート番号を使用する問題を修正しました。デフォルト値を使用する場合、イメージ URL にポートを追加しないでください。

9.2.2.6. RPM ベースの Ansible Automation Platform

- 複数のハブノードが設定されている場合に **gpg** エージェントソケットを適切に設定しないと、**/var/run/pulp** に **gpg** ソケットファイルが作成されない問題を修正しました。

9.2.2.7. Ansible 開発ツール

- **molecule** RPM パッケージにデータファイルが不足している問題を修正しました。

9.3. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM パッチリリース 2024 年 10 月 28 日

Ansible Automation Platform のこのリリースでは、次の機能拡張とバグ修正が実装されています。

9.3.1. 機能拡張

9.3.1.1. Ansible Automation Platform

- この更新により、RPM および Operator ベースのデプロイメントで Ansible Automation Platform 2.4 から 2.5 へのアップグレードがサポートされるようになりました。アップグレード方法の詳細は、[RPM によるアップグレードと移行](#) を参照してください。(ANSTRAT-809)
 - 現時点では、コンテナ化された Ansible Automation Platform 2.4 (テクニカルプレビュー) からコンテナ化された Ansible Automation Platform 2.5 へのアップグレードはサポートされていません。

- Ansible Automation Platform 2.4 から Ansible Automation Platform 2.5 への Event-Driven Ansible のアップグレードはサポートされていません。

9.3.1.2. Ansible Automation Platform Operator

- Automation Hub URL のルートに移動すると、有用なリダイレクトページが表示されるようになりました。(AAP-30915)

9.3.1.3. コンテナベースの Ansible Automation Platform

- TLS 認証局の秘密鍵でパスフレーズを使用できるようになりました。(AAP-33594)
- Automation Hub に、コンテナイメージ (決定環境と実行環境) と Ansible コレクションが取り込まれるようになりました。(AAP-33759)
- Automation Controller、Event-Driven Ansible、Automation Hub の従来の UI で、空白ページではなく、プラットフォーム UI へのリダイレクトページが表示されるようになりました。(AAP-33794)

9.3.1.4. RPM ベースの Ansible Automation Platform

- RPM ベースの Ansible Automation Platform にプラットフォーム Redis を追加しました。これにより、Redis の高可用性 (HA) デプロイメント用の 6 ノードクラスターが可能になります。変数 `aap_caching_mtls` を削除し、Redis サーバーの TLS および Redis クライアント証明書認証を無効にするブール値フラグである `redis_disable_tls` と `redis_disable_mtls` に置き換えました。(AAP-33773)
- Automation Controller、Event-Driven Ansible、または Automation Hub URL にアクセスすると、有用なリダイレクトページが表示されるようになりました。(AAP-33827)

9.3.2. バグ修正

9.3.2.1. Ansible Automation Platform

- **Authentication Type** リストから **Legacy external password** オプションを削除しました。(AAP-31506)
- プラットフォーム UI が正常に認証できるように、Ansible Galaxy の **sessionauth** クラスが認証クラスのリストで常に最初に表示されるようになりました。(AAP-32146)
- [CVE-2024-10033](#) - **automation-gateway: automation-gateway** コンポーネントのクロスサイトスクリプティング (XSS) の脆弱性を修正しました。この脆弱性を利用すると、悪意のあるユーザーがユーザーに影響を与えるアクションを実行することができました。
- [CVE-2024-22189](#) - **receptor**: 攻撃者が古い接続 ID を廃止する **NEW_CONNECTION_ID** フレームを大量に送信することでサービス拒否を引き起こせる **quic-go** の問題を解決しました。

9.3.2.2. Automation Controller

- [CVE-2024-41989](#) - **automation-controller**: この更新前は、Django で **floatformat** が大きな指数を持つ科学的表記の数値の文字列表現を受け取ると、メモリー消費が大幅に増加する可能性があります。この更新により、200 桁を超える小数がそのまま返されるようになりました。
- [CVE-2024-45230](#) - **automation-controller**: 特定の文字列を過剰に入力するとサービス拒否が発生するという、Python の Django **urlize()** および **urlizetrunc()** 関数の問題を解決しました。

9.3.2.3. Automation Hub

- Ansible Automation Platform 2.5 デプロイメントに必要な認証クラスを保持するために、**dynaconf** フックをリファクタリングしました。(AAP-31680)
- ロールの移行中に、所有権を保持するためにモデル権限がロールに再度追加されるようになりました。(AAP-31417)

9.3.2.4. Ansible Automation Platform Operator

- 外部 Redis キャッシュを使用する場合に、プラットフォームゲートウェイキャッシュの **redis_host** 設定を指定するときにポートが正しく設定されるようになりました。(AAP-33279)
- Automation Hub デプロイメントにチェックサムが追加されたことにより、PostgreSQL 設定と Galaxy Server 設定の Kubernetes シークレットの変更を、Pod が循環して取得できるようになりました。(AAP-33518)

9.3.2.5. コンテナベースの Ansible Automation Platform

- 環境がすでにアンインストールされている場合のアンインストール Playbook の実行を修正しました。(AAP-32981)

9.4. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM パッチリリース 2024 年 10 月 14 日

Red Hat Ansible Automation Platform のこのリリースでは、次の修正が実装されています。

9.4.1. 修正された問題

9.4.1.1. Ansible Automation Platform

- UWSGI の出力ログを調べたときに無関係と思われるメッセージが表示されるプラットフォームゲートウェイの問題を修正しました。(AAP-33213)
- Redis への接続試行時に **cluster_host** エラーを引き起こす外部 Redis ポート設定の問題を修正しました。(AAP-32691)
- 外部 Redis が設定されている場合でも、マネージド Redis がデプロイされる原因となっていた誤った条件を修正しました。(AAP-31607)
- Ansible Automation Platform を初めてデプロイしてから、Ansible Automation Platform CR 仕様の Automation Controller、Automation Hub、または Event-Driven Ansible セクションに変更を加えると、その変更がコンポーネントのカスタムリソースに反映されるようになりました。(AAP-32350)
- フィルター **keep_keys** を使用する場合のアドレス指定の問題を修正しました。すべてのキーがディクショナリーから削除されます。**keepkey** の修正は、更新された **ansible.utils** コレクションで利用できます。(AAP-32960)
- メトリクス距離が **forward_router_address** 属性に入力される **cisco.ios.ios_static_routes** の問題を修正しました。(AAP-32960)
- Ansible Automation Platform Operator がメトリクス設定をコントローラーに転送しない問題を修正しました。(AAP-32073)

- ジョブテンプレートなどのリソースに認証情報を要求するスケジュールがあり、その認証情報をリソースのデフォルトの認証情報とは異なるものに更新すると、新しい認証情報が API に送信および更新されない問題を修正しました。(AAP-31957)
- 他のコンテキストなしで `*pg_host=` を設定すると、コントローラーの `settings.py` の HOST セクションが空にならない問題を修正しました。(AAP-32440)

9.4.2. アドバイザリー

このリリースには次のエラータアドバイザリーが含まれています。

- [RHBA-2024:8079 - Product Release Update](#)
- [RHBA-2024:8084 - Container Release Update](#)
- [RHBA-2024:8096 - Cluster Scoped Container Release Update](#)
- [RHBA-2024:8141 - Setup Bundle Release Update](#)

9.5. ANSIBLE AUTOMATION PLATFORM パッチリリース 2024 年 10 月 7 日

Red Hat Ansible Automation Platform のこのリリースでは、次の機能拡張と修正が実装されています。

9.5.1. 機能拡張

- Event-Driven Ansible のワーカーとスケジューラーに、Redis クラスターとの通信時のタイムアウトと再試行による回復性が追加されました。(AAP-32139)
- 誤って追加された **MTLS** 認証情報タイプが削除されました。(AAP-31848)

9.5.2. 修正された問題

9.5.2.1. Ansible Automation Platform

- 復元ロールの必要なタスクをスキップする条件を修正しました。これは復元の調整が完了しない原因となっていました。(AAP-30437)
- コンテナインストーラー内の Systemd サービスで、再起動ポリシーがデフォルトで **always** に設定されるようになりました。(AAP-31824)
- **FLUSHDB** が、Redis データベースの共用を考慮して変更されました。クライアントがアクセス権を持つキーのみを削除することで、アクセス制限が考慮されるようになりました。(AAP-32138)
- **Prompt on launch** ウィザードでデフォルトの `extra_vars` 値がレンダリングされるように修正を追加しました。(AAP-30585)
- 使用されない **ANSIBLE_BASE_** 設定をジョブ実行の環境変数から除外しました。(AAP-32208)

9.5.2.2. Event-Driven Ansible

- RPM インストーラーで **MTLS** が許可されないように、**EVENT_STREAM_MTLS_BASE_URL** 設定を正しいデフォルトに設定しました。(AAP-32027)

- コンテナインストーラーで MTLS が許可されないように、`EVENT_STREAM_MTLS_BASE_URL` 設定を正しいデフォルトに設定しました。(AAP-31851)
- Redis のプライマリーノードが **failed** 状態になり、新しいプライマリーノードが昇格すると、Event-Driven Ansible のワーカーとスケジューラーが Redis クラスターに再接続できなくなるバグを修正しました。このバグが修正される前に必要だった手順が記載されている KCS の記事 [Redis failover causes Event-Driven Ansible activation failures](#) を参照してください。(AAP-30722)

9.5.3. アドバイザリー

このリリースには次のエラータアドバイザリーが含まれています。

- [RHBA-2024:7756 - Product Release Update](#)
- [RHBA-2024:7760 - Container Release Update](#)
- [RHBA-2024:7766 - Cluster Scoped Container Release Update](#)
- [RHBA-2024:7810 - Setup Bundle Release Update](#)